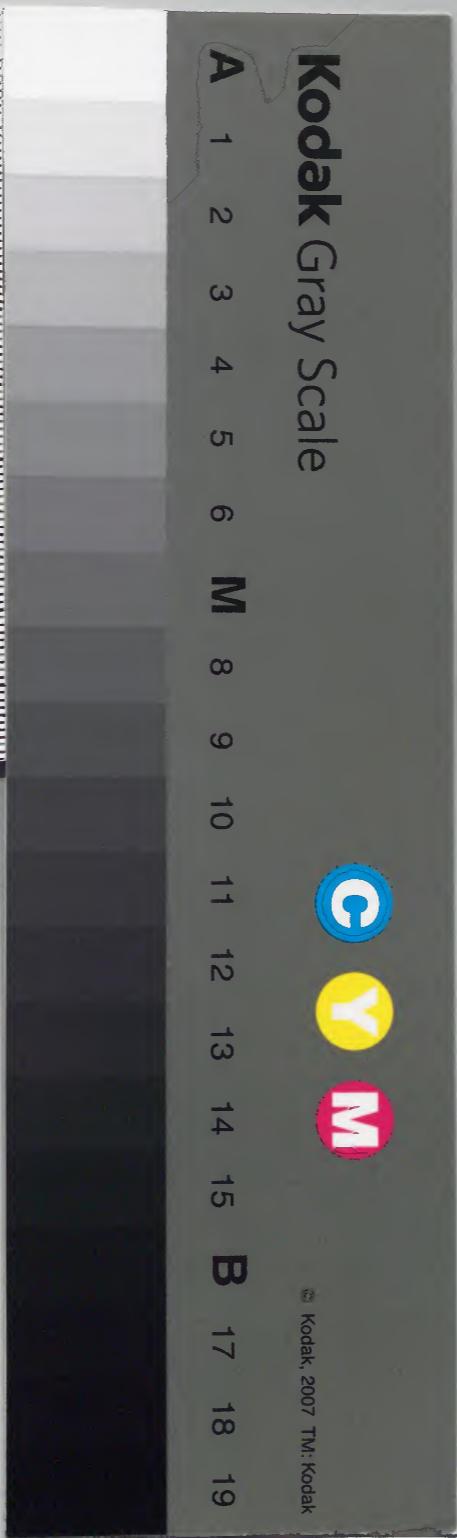


日本書紀傳 廿五卷

和書  
一〇五二二號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156( 91)	
函號	特 85	1

内閣文庫



教部省  
文庫印

第二

文庫  
圖書

日本書紀傳二十五之卷

神代卷二十三

寶劍出現章

穗積重胤

謹撰

於安藝國可愛之川上到

於安藝國可愛之川上也彼

處有神名曰脚摩手摩其妻

名曰稻田宮主篁狹八箇耳

日本書紀傳二十五

〇一

内一二六八

此神正在妊身夫妻共愁乃  
告素戔嗚尊曰我生兒雖多  
每生輒有八岐大蛇來吞不  
得一存今吾且產恐亦見吞  
是以哀傷素戔嗚尊乃教之

曰汝可以衆菓釀酒八瓿吾  
當為汝殺蛇二神隨教設酒  
至產時必彼大蛇當戶將吞  
兒焉素戔嗚尊勅蛇曰汝是  
可畏之神敢不饗乎乃以八

瓿酒每口沃入其蛇飲酒而  
ハラノサケゴトニクチソギイレ五ハロソノヲロチノミサケラニ  
 睡素戔嗚尊拔劔斬之至斬  
ホフリキコニスサノヲノミコトマキテツルギラキリクフハコイリテキリテ  
 尾時劔又少欽割而視之則  
ソラトキニツルギノハスコシカケキスチサキテミツナハシハバ  
 劔在尾中是號草薙劔此今  
ツルギアリソノヲナカニコレクサナギノツルギナリコハイマ  
 在尾張國吾湯市村即熱田  
マヌヲハリソクニアユケノムラニノスチケアツクノ

祝部所掌之是也其斷蛇之  
ハフリカツカサトリマツルカミ神ヲレナリソノキリテハヲロチヲル  
 劔號蛇之麤正此今在石上  
ツルギノナハ曰ヲロチノアラマサトコゴムイママヌイソノカミニ  
 也  
ナリ

素戔嗚大神の天上より天降り御在上坐し著せさせ  
 給へる地の事正書又第一ノ一書ハ降到於出雲鯨之  
 川上と見え古事記よ降出雲國之肥之河上在鳥髮  
 地と有之此ハ其所を委しく云々者あり第四一書ハ

ハ右と同トク東渡到出雲國鞆川上所在鳥上之峯と  
有り然れども其心已小新羅國小先降著うせ給ひて  
其より東方此地小渡給へる趣即是一の異説なり  
若て此傳ハ一も下到於安藝國可愛之川上也と有之  
出雲ハ謂ゆる山陰道あり安藝ハ即山陽道あり地理  
小大ある違有れば是亦む實小大ある異説ハ有け  
る然きと已小傳廿三十二論らひ辨へたるが如  
く古史第六十七段徵小引きたる鳥上二水考證と云  
書小夫安藝國者非國名也出雲風土記所載意字郡安  
來郷而今屬能義郡而作ハ杉郷者是也先輩泥文字而

混山陽安藝誤訓之阿伎能久迹遂失其正矣宜改訓野  
珠魏能玖迹也以郷称國者舊證多矣可愛之河則經流  
於安來郷伯耆大川是也其源出於出雲國仁多郡能義  
郡之坂葛野山而上流謂之伊志尾川北過母理安來等  
之郷而入于伯耆國經舟上及米子等之地而入海兵謂  
之日根川也以其伯耆總名之伯耆大川也出雲風土記  
曰伯耆大川源出仁多與意字二郡坂葛野山流經母理  
楯縫安來三郡入海今割意字郡為能義郡故葛野山其葛  
野山之在二郡之坂也東南與鳥上峯麓相近矣然則可  
知伊志尾川之源不遠于鳥上之峯焉故以真髮觸奇指

此傳の異説が  
却りて正しき傳を  
更と見認る  
説をいふ

田媛遷置於鞆河之上而長養者以迎接其坂也案各重  
訪安藝國不聞有可有安藝川者當兵予友祝利萬呂者安藝國  
之人而盡心於有本書紀久矣雖可有愛之河于安藝國平  
不得其蹤又求有雲藝二國接壤之地否亦無得之矣云予  
信其說故不復求諸藝州專求諸雲州而得其舊蹟也  
と有有公實小謂有きたる書有て殊當國の人小有て地理  
小明有る有説有ふ有れ有必有此を諾ふ小足れる者なりけり  
平田翁の此説を良考として取られたる有大有佳有ト  
且下小引る風土記安來郷の文を引きたる有と實小然  
り然れども其安來郷小天降り坐る事有と新羅國より  
渡來坐る御事小合有せたり有ハ此第四一書をの有一有向  
小五たり説小有て此大神の御天降の先後小就て  
す可有き事有の有小思有の及有ハさり有し者有小て全有くハ難取  
くふ有じ然有る有に此小地神本紀小到出雲國鞆之河上與  
有ける有安藝國可愛之河上在鳥上峯矣素戔鳴尊到於出雲國

鞆之河上名鳥髮地と所見たり此ハ共小紀記二典小  
出たる事有るを此を捨ず彼をも捨トと勉めて  
み合せり者有ふして右の文の如く小てハ何れを其  
と捉ふ可有き處無有き小似たり有雖も又此小味有ハ  
可有き所有む有有る其ハ右の出雲國鞆之河上ハ此正  
書第一一書を取れる者有り次有る安藝國可愛之河  
上所在鳥上峯ハ此第二一書と第四一書とを合せて  
續けり者有り終乃出雲國鞆之河上名鳥髮地ハ古  
事記より抽出たる事云も更有なり然有ハ右の鳥上峯  
を安藝國可愛之河上と云事ハ殊小大有ハ異説と云

者ふらふ又其謂を無しとハ決めて云へらうすか  
む有けり其可愛之河と云ハ出雲風土記ハ意宇郡長  
江山郡家東南五十里精有水と有る是山に属して流る川其水源ふりと聞  
えたり然して其下流即伯太川あり可くや同記ハ伯  
太川源出仁多與意宇二郡坂葛野山上流經母理楯縫安  
來三郷入于海有年魚伊久比と見えたり其水源異なる  
如しと雖も大河を衆流の會て成れる者ありけり  
何よりと云むも難無きを其葛野山最奥よりなる  
所なるを以て此を水源と云ふことあり有けり長江山  
を巡流るる故ハ右の伯太川可愛之河と云一名

も有けむ事を知べし若て其長江山を郡家東南五十  
里と有れば意宇郡の極際ハカリハ伯耆國と相接ける地  
あり事論を待ず又仁多郡鳥上山郡家東南廿五里伯耆  
與出雲之坂有鹽味葛と有る其仁多郡ハ意宇郡よりハ南西ハ  
當きハ鳥上山と長江山とハ共ニ並びて兩國の坂  
あり事云も更あり右の二水考證ハ其葛野山之在二  
郡之坂也東南與鳥上山麓相近矣然則可知伊志尾川  
之源不遠鳥上山之峯焉と有るも合さハ鳥髮之峯を可  
愛之河上と云も謂きさる事ハ非ず風土記ハ當國  
ふて書せらる故ハ事實を過すさるを京ふて記せ

る書ふ々其許の差ハ有べき事ふから右の地神本紀  
然る善本の有を取らあり可ければ其安藝國可  
愛之河ハ正しく出雲國あり事を徴す文と成りて却  
小異説ハ非ず又此一書を正す明文とも成れらふ  
む矣小神祇の恩賜ハ有ける數字歎ハ作まらるを今  
改りて引り但右の意  
字と仁多と二郡塚と云らも二水考證ハ云らるが如く  
今ハ能義と意字の塚と成れら右の可愛之河も即  
能義郡あり事若て此ハ彼處有神名曰脚摩手摩其妻  
云と更あり名曰稻田宮主篁狹之八箇耳と有殊小甚しき異説  
小て有けり正書ハ吾是國神號脚摩乳妻號手摩乳と  
見之古事記も右と同一く老夫與老女二人在而略故

其老夫答言中略僕名謂足名推妻名謂手名推と見えて  
正しく夫妻の名ありを脚摩手摩と合せて一神の名  
と為り事甚其謂き無き者あり又其妻名曰稻田宮主  
篁狹之八箇耳と有も愈以て心得ぬ事少て正書ハ乃  
相與適合而生兒大己貴神因勅之曰吾兒宮首者即脚  
摩乳手摩乳也故賜号於二神曰稻田宮主神と有て此  
後小素戔鳴大神奇稻田姬命と稻田宮小住せ給ひ御  
兒大己貴神を令生給へら後子其御兒を傳き参らす  
る事小就て賜ふ所少して其老夫婦二神も亘ら称ふ  
るを此よりハ遙小後小賜へら号を前小廻りして妻



神一神の名と為るハ殊小有より倅傳から者あり  
但右の二神ハ巨ク稲田宮主神と此ハ別ありと云  
むり然きとも上の第一一書小も二神小係けて稲田  
宮主簀狹之ハ箇耳女子と見え傳の趣ハ少ハ異あり  
と雖も古事記ハ於是喚其足名推神告言汝者任我宮  
之首且負名號稲田宮主須賀之ハ耳神と有ハ妻神の  
名ハ出さルズかく其夫妻二神の糸あり事ハ此  
の正書小名セて自然次小此神正姪身夫妻共愁乃告  
著明き者ありと云  
素戔嗚尊曰我生兒雖多每生輒有八岐大蛇來吞不得  
一存今吾且産恐亦見吞是以哀傷と有ハ中ハ異説  
有り此神正姪身と云ひ吾且産と云ハ共子疑ハ  
事あり正書小置一少女撫而哭之中今此少童且臨  
被吞無由脱免故以哀傷と有ハ已言長ト成ハ趣ハ

る小甚ク異ハ傳説小て有けり次の第三一書小ハ  
素戔嗚尊欲幸奇田媛稻而乞之と有ハ已小嫁ク可キ頃  
不ハいハも至マ如キ書サレハ狀ハて此ハ餘リ小過レ  
りとも云へハむを此ハ未生出ザ以前ヨり老  
夫婦の其心遣ヒ為ル趣ハ決メて然ハ有リトキ  
事誰も知れハ如シ右の如ク小てハ其脚摩乳手摩  
乳と云も今正ニ吞ミ吞ミあハと為ルが愛ハ不レトキ頭ハ  
玉後ヨり其少女を搔撫テ傳フ居ル子因レ名ハ  
りけむハ合ハすテあハむハ古事記ハ正書ト同シけれ  
一傳ありハつハむハ此ハ彼ハ者ト素戔嗚尊  
撰ハ培ルれズて此ハ載ラまレ者ト素戔嗚尊

乃教之曰汝可以衆菓釀酒ハ麩ヒ有ハ寄ル傳ハカ  
り此事ヲ合せて第三ノ書ニ素戔鳴尊乃計釀毒酒ト  
云事の有ル依て私記ニ衆菓是取集意味毒菓而釀之  
ふと云説も有ル事ヲふまシ此ノ論ニ有ル事ヲて  
始より大蛇を醉伏シのて斬せ給ハむ神衆の御在リ  
坐ケけるルハ毒ヲふリ酒ノ毒ニ成レるルあり  
然レハ毒ノ字ヲを止て唯此の本文の如く衆菓を以て酒  
を釀スと云事甚ニ床ノ傳ル者アリ又唯此一書  
の愛タき事ハ草薙劍の事ヲ此今在尾張國吾湯市村  
即熱田祝部所掌之神是也ト書サれ次ニ其斷蛇劍号

曰蛇之鹿正此今在石上也ト有ル此ニ上ニ安藝  
國可愛之川上の事ハ衆菓を以て酒を釀ル事ヲ合セ  
て此四條ハむハ無キ事ヲて實ニ賜物ハ有ケ  
るハ但其草薙劍の事ト斷蛇劍の事ハ第三ノ書ニ有ル  
て互ニ精シきと鹿ノ有ルと相照シ合セて  
大ニ得ル所ニ有ル者ハ不レり鹿忽シ見ル事ハ無レ○安藝國ハ夜須岐能久迹ト訓  
ふキ事上引ル鳥上ニ水考證の説ハ明クあり  
者アリ出雲風土記ニ意宇郡安來郷郡家東南二十七  
里一百八十歩神須佐乃鳥命天壁立廻坐之尔時來坐  
此處而詔吾御心者安平成詔故云安來也ト有ル是ハ  
り此文ハ天壁立ト有ル祈年ノ月次等祭詞ニ皇神ヲ見

齊志吐四方國者天の壁立極國の退立限と所見たる  
是より謂ゆ天上天の遠涯を云事已小祝詞講義注  
又姓氏錄小所見たり天壁立命の御名小就て云べ  
事有て傳三七下四百委トク注せル如シ然れル  
此ハ其素戔鳴大神の高天原より天降り御在し坐し  
著せ給へる御時の事ふを此第四の書小降對於新  
羅國中略東渡到出雲國簸川上所在鳥上之峯と有と  
小混せて先新羅國小天降給ひ其より此地小渡來坐  
者と思ふハ甚ク誤れル者あり此大神の御天降の  
事二度ふを其先ふ謂ゆハ百萬神小被逐て

天降給へりあり此時小樹種を將下り給ひて大八  
洲國を青山と成し給へるありマキ其ハ新羅より渡給へり次度小皇太神の御  
許ニ先の御過を悔て辭見小參上りて給へりありて此  
度小三女神をも御伴ふて天降り給へりありが  
五十猛神も其同列ふ御在し坐へりありと然る小  
て此ハ天上より天翔り國翔りして此安來郷は  
御在し坐し著せ給へりけむ事右の天壁立廻坐之の  
文にて明らかあり者あり其兩度の御天降の御事を  
の故事を説ふハ滯り所有て説得ル者多ク此簸川  
其由傳二十二卷百十ト始メ又二十三  
卷の首ニ委トク云り此時の御詔小吾御心安平成  
被見て其味を知べし

日本書紀傳二十五

詔有ハ其安ク平リク成ラセ給フ可キ所以有テ  
詔給フ所ハ唯土地山川の形勝を愛給フ云々  
云非ズ又豫テ所思着ス大業を悉ク果サセ御在  
坐リト云々非ズ又遙ク上天より天降著セ給ヒ  
テ御心の落居サセ給フ云々非ズ其安平成詔ト  
云々何事ク其小當ル事の無クテハ必詔フ事ナ  
御言多ク者アリ故借其由来を攷ム小上章第三一  
書小見えたり其時の御辞見小請妙照臨天國自可平  
安且吾以清心所生兒等亦奉於嫡已而復還降焉有  
ル此御時小五男神を奉ヒセ給ヒ其小就テ云女神を

賜リテ率テ降坐ト此國小留リ住セ御在坐テ謂四  
ノ御妻問の御事小御在坐テ其御兒神を令生給  
ヒニ柱御祖神の事依テ奉ラセ給ヘテ御契違ヘサセ  
給フ治給フ可キ時運ニ至ラセ給ヘリケレ何ト  
無ク御心の安ク平リケレ御在坐ト初テ以テ  
其御言を宣マシ舉ガセ給ヘラ故小此の地名ト云  
成ルリケレ者ナリ此後ハ岐大蛇を退治サセ給ヒ  
彼草薙御劍を得サセ御在坐テ天神の御許小奉  
セ給ヒ其奇稲田姫命ト御合坐ベク御心の隈  
御言多ク小合セ思フ可シ○可愛之川上ハ八洲起元  
章第一一書小可愛此云哀と有リ哀の訓小江之川

と云事あり可下其六風土記小意字郡長江山郡家東  
南五十里精有水と有ハ江山と云長の言を冠の言を冠る者  
其長江山之川ハ長江之川の長字の省りたりと聞ゆ  
れ以同小地名多々争曉られたり備上ふも引り伯太  
川源出仁多與意字二郡環葛野山流經母理指縫安來  
三郷入于海有年魚と有ハ此伯太川を二水考證小伯  
考太川亦作りて可愛之川是あり由小云るハ然る言  
亦て此水流の母理郷を經ゆと云小思合せり事  
小母理郷郡家東南世九里十百九廿歩所造天下大神  
大穴持命越本國平賜而還坐時來坐長江山而詔我造

坐而令國者皇御孫命平世所知依奉但八雲立出雲國  
者我靜坐國青垣山廻賜而玉珍置賜而守詔故云文理  
神龜三年改字母理と有ハ長江山ハ右小見えたる郡家東南五  
十里と有ま其地より母理郷ハ西北小當りて凡十  
里程の麓と聞ゆ然れバ伯太川の水源を葛野山と云  
ハ其長江山と近き地ありしを其長江山すりの水  
凡共小流化入を以て其方を主として江之川とハ云  
けむと其全体小取て之時ハ伯太川より其上流を後  
小伊志尾川と云云凡てを伯耆大川と云事と成て古  
小可愛之川と云ハ舊名のせりける者あり小云と

今古事記出雲國  
之肥河上在鳥上  
地と見え又此

但神武天皇甲寅年御紀十有二月丙辰朔壬午至安  
藝國居于埃宮と有と此の安藝國可愛之川と相似  
言ありて古より人の混ぶる事ありが彼地ハ古  
史記ハ於阿岐國之多祁理宮七年坐と有て神名式  
安藝國安藝郡多家神社名神大と有る處ハ今府中  
と云る地是ハ右の安來郷とハ南北凡五十里余  
を隔れらば更ハ由無一又通證ハ一説を録して云々  
山縣郡戸内村有十方山根雲石二州甚峻高有石窟  
相傳太古大蛇居之至今雲霧勝風雨不時同郡有可  
愛淵而源出十方山多奇石怪巖疑此と有れとも然る  
大蛇の居處ハ有けめとも○彼處有神の彼處ハ  
此可愛之川ハ北なる者あり  
右ハ謂ゆる可愛之川上なる地を指るハ上ハ下ハ引  
る地神本紀ハ安藝國可愛之河上在鳥上峯と云る是  
なりハ論め云るハ如く此夫婦二神の所在ハハ  
正書第一一書ハ出雲國簸之川上と有り第四一書ハ

神自河口至河上橫田村  
之間五郡百姓便河而  
居

ハ出雲國簸川上所在鳥上之峯と有る其鳥上地ハハ  
風土記ハ仁多郡鳥上山郡家東南廿五里伯耆與出  
鹽味と有て其出雲郡條ハ出雲大川源自伯耆與出雲  
二國坂鳥上山流出仁多郡橫田村即經橫田三處三澤  
布勢等四郷出大原郡坂引沼村即經來次斐伊屋代神  
原等四郷出出雲郡坂多義村經河丹出雲二郷北流更  
折西流即經伊努并築二郷ハ神門水海此則所謂斐伊  
河水也見えハ如此ハ斐伊河の水源なり者ハ  
仁多と意字ハ相接けり地ハ有けりハ其鳥上山  
の片方ハ意字郡ハ係りけり可き地の状ありを以て

安藝國可愛之河上鳥髮地とも云れざる小ハ非ざるの  
 然れバ此時の事實を今惣云むハ素戔嗚大神天  
 より先安来子降生小其より可愛之川謂ゆる伯太川  
 を水の任小上り給ひ鳥髮地也此其老夫婦二神の許  
 至坐小其より彼大蛇を鯨之川上小て退治させ給  
 へる運ひと云む見えたりける通河上天淵記小經大  
原郡福武莊到八頭坂  
簾長者原但有老翁嫗云云有る事ふる其小就て  
少云云べき事の有て已小傳二十三卷百十丁小  
云り見合 ○脚摩手摩正書小國神號脚摩乳妻名号  
す可一 手摩乳有が如小夫妻三神の名ふるを其乳字略  
き續けて 夫神一柱の名と為るハ誤る事上七小巳

小云るが如小但此ハ舊讀小從ひて阿志那豆底那豆  
 訓て有べト ○其妻名曰稻田宮主篁狭之八耳音此  
 妻神一柱の名と為るハ異ふる説あり事上七小巳小  
 云ひ其名義の委しき事ハ傳二十三丁百二十四丁  
 小説たりき ○在妊身ハ波良米理と訓り此言小當て  
 書れたる所ハ天孫降臨章小即一夜而有娠略中雖復  
 天神何能一夜之間令人有娠乎汝所懷者必非我子歟  
 其第二一書小則一夜有身ハラメス妾孕ハラメ天孫之子第五一書  
 小即一夜有身ハラメス略天神能令一夜有娠第六一書小一夜  
 而有身ハラメリ又海宮遊行章第七一書小妾已有娠也仲哀天

但通證波羅字、  
腹生也韻瑞娠通  
作身詩大任有身  
と云る腹生、方勝  
まりや源氏竹川  
ひ小けり云と見  
え又梅芒おどの  
穂を合合む事  
長寛勘又の一本  
此文を引く事字を  
婦子作れり誤り  
右小其妻と有て  
著り

皇八年御紀小唯今皇后始之有胎其子有獲焉應神天  
皇御紀小初天皇在孕而天神地祇授三韓雄略天皇元  
年御紀小臣聞易產腹者以禪繩體即便懷娠ふど所見  
たり同言小十て字遣の異ふるのこたり又胎字を波  
良暮母流とも訓る也右小同詩拾注小孕而未生曰  
胎と有り言義ハ腹聚ふる可一今一ハ腹隱ふるなり  
○夫妻ハ八洲起元章小爲夫婦と有も共小衣登賣と  
訓るハ己小傳六百小注せるが如く夫人婦人ヲヒトノヒトと云言  
ふも云り記中上の數多若苗の生たれり植ヲヒト人たらし  
うバ孕して未引せらるる爲り大木丸夏深き孕ハヒト人たらし  
藤芒下這纏ふ葛の帯して十一ハ秋風小孕を薄の有る野也ハヒト  
一の西路や色ハヒト悲へるハヒト共ハヒト悲ハヒト下ふる是ハヒト以哀傷ハヒト對ハヒト所ハヒトあり正  
書小有一老公與老婆中間置一少女撫而哭之と有小

當れる言ふり○我兒雖多ハ四神出生章小吾息雖多  
と有小同ト此ハ正書小往時吾兒有八箇少女と有を  
大凡小云らあり次小不得一存と有小合せて曉ら可  
一雖多と云言の例ハ万葉三三十三ハ下小高山者左波尔雖  
有と有り○每生ハ字年多毘暮登尔と訓ら小依べ  
即生度毎尔の意あり正書小ハ毎年為ハ岐大蛇所吞  
と有ハ己小長と成れら少女の有を毎年小吞らとを  
此ハ其夫妻ハ神の関胎を知て其產生す度毎ふと  
云意ふる故小右の毎生の字を被用たるあり斯ら所  
暮登尔と云て古言の状ありけれども私記ハ字年太  
比期止尔と有れハ己くすり然訓来れる者ありけり



但通證波羅字、  
腹生也韻瑞娠通  
作身詩大任有身  
と云る腹生方勝  
まり源氏竹川  
ひしけりこと見  
と人給むかど  
の

皇八年御紀小唯今皇后始之有胎其子有獲焉應神天  
皇御紀小初天皇ハラミヤ在孕而天神地祇授三韓雄略天皇元  
年御紀小臣聞易產腹者以禪觸體即便懷娠ハラミヤふど所見  
たら同言小十て字遣の異ふるのこたり又胎字を波  
良碁母流とも訓る也右小同ト詩格注良年とも波  
胎と有り言義ハ腹聚ふる可一今一ハ腹隱ふるなり  
○夫妻ハ八洲起元章小爲夫婦と有も共小表登賣と  
訓るハ己小傳六百小注せるが如く夫人婦人ヲヒトノヒトと云言  
の約れる子て俗子此を賣衰登と云ハ婦夫人ヲヒトノヒトたらし  
異ふるず。○共愁ハ下ふる是以哀傷小對ふ所あり正  
書小有一老公與老婆中間置一少女撫而哭之と有小

當れる言ふり○我兒雖多ハ四神出生章小吾息雖多  
と有小同ト此ハ正書小往時吾兒有八箇少女と有を  
大凡小云るあり次小不得一存と有小合せて曉る可  
一雖多と云言の例ハ万葉三三十一ハ下小高山者左波尔雖  
有と有り○每生ハ字年多毘碁登尔と訓る小依べト  
即生度毎尔の意あり正書小ハ毎年為ハ岐大蛇所吞  
と有ハ己小長と成れり少女の有を毎年小吞るを  
此ハ其夫妻ハ神の関胎ケムタを知て其產生す度毎ふと  
云意ふる故小右の每生の字を被用たるあり斯る所  
碁登尔と云て古言の状ありけれども私記ハ字年太  
比期止尔と有ハ己くすり然訓来ル者ありけり

○不得一存の存字官板ハ、伊祢流と訓ル。金澤  
本ハ、麻多伎と訓リ其方ヤ然ル可ク、天孫降臨  
章第二一書子假使天孫不存妾而者生兒永壽者如磐  
石之常存と有る常存を官本ハ、常石ハ麻多加良麻志  
金澤本ハ、麻多加良年と訓ミ次子吾所娘是若他神之  
子者必不幸矣是實天孫之子者必當全生と有テ此子  
ハ不幸字を其反ヨ用ヒテ全生字子對ヘ麻多久と伊  
伎多麻幣の言を重ぬたり又此と同一事を其第五一  
書子妾所娘若非天神之胤者必亡是若天神之胤者無  
所害と作レテ右の不幸を亡字ハ全生を無所害と換

テ書リレたり其義の歸也所相異也故不  
又景行天皇十七年御紀思邦の大御歌子異能知能  
摩會祢務比苦破多彌許莽幣遇利能夜摩能志邏伽  
之餓延塙干受珥左勢許能固と有る此大御歌を古事  
記同段ハ倭建命の御歌一ハ麻曾祢務を麻多祢年  
志邏伽之餓延塙を久麻加志賀波袁子許能固を曾  
能古子換たり其摩會祢務ハ將真幸あり麻多祢年  
ハ將全ハ其義相通故あり万葉四七ハ吾命  
之將全幸限忘目弥日每者念益十方十二荒玉  
之年緒長如此戀者信吾命全有目八方十五伊

能知洋之麻多久之安良婆安里伎奴能安里互能知亦  
 毛安波射良米也母一云安里互亦右等を以有り且麻多久  
ハ麻佐伎久ハ大凡相近きを知べし存字○且産ハ古  
を以全字をも作何れ其意ありあり○且産ハ古  
 字麻年登須と訓し海宮遊行章第三一書子妾今夜當  
産ム産請勿臨之第七一書小天孫之胤豈可産於海中乎故  
コウナム當産時必就君處第八一書子先是豐玉姬出来當産時  
 請皇孫曰云云コウナム當産字也作ミ訓も共小等作キ者あり  
 又其正書及古事記同段此産此の一字を古字年と  
 訓し仁徳天皇五十年御紀於波田堤カリコヤム産之有其  
 事を問ハせる大御歌小阿耆豆辞島椰日本等能區國耳

箇雁利古武等正難不波企箇輸椰不有秋其答歌津阿企莞  
鳥辞摩椰日本等能俱耳國箇利古武等産和例破不積箇儒不有  
 乃此二の古武ハ子生コ小て即産字小當ミ者あり右  
且字ハ此小てハ當字之同一意小用ハらレたルあり  
詩鷄鳴日會且歸矣と有リ呂氏春秋音律篇注且將  
也○恐亦見吞ハ亦吞禮那年袁添曾理と訓ベし諸  
本共小恐字を始小讀テ添曾良久波云云とハ漢籍  
 風小ハ古小例無キ事あり此ハ其子の亦吞ミ事  
 を悚懼リ義多レバ恐字後小廻シて訓ハくコ雄  
 略天皇五年御紀繼體天皇前紀ふど小失色を添曾理  
 阿夜麻流と訓リ此言の例あり其漢文訓の恐字をも  
伊勢貞丈説添曾良

久波と訓ハ誤り宇多賀布良久波ニ訓ベ一字彙小  
 欺用切疑也慮也臆度也と有り云々然ルとも將未  
 来を危ぶむ意不レハ訓○是以哀傷ハ正書小今此少童  
 且臨被吞無由脱免故以哀傷と有と同意あり傳世三  
 百七十云リキ○可以衆菓釀酒ハ甕ハ正書子釀ハ  
 醞酒と有る事實を委しく云々あり次あり第三一書  
 小釀毒酒と云ハ其衆菓を以てハ醞酒を釀造其小  
 飲醉て大蛇の殺ハ奉レハ謂小依て毒字を冠たる  
 者ホトて皆共ハ一物を云なり傳世此衆菓ハ第五一書  
 小夫須噉八十木種皆能播生と有る是ハ素戔鳴大  
 神の初度天降り御在レ生けり時ハ五十猛命と共小

應神天皇十九年御  
 紀取山菓食と  
 有る然訓り

國丹悉く殖生レ置トを始て此子用ひさせ給へる  
 あり由已子傳世三田間大室訓セリ如菓字古事記  
 八神段小年久木實有ると見え又唯小木實と書され玉  
 垣宮段小登岐士玖能迦玖能木實と有ふとハ此の言  
 の任小目易く書きたり者あり和名抄小菓菰唐韻  
 云説文木上曰果字或作菓日本紀私記云地上曰瓜果  
 和名久佐漢書注張晏曰有核曰菓無核曰棗菓棗見應劭曰  
 久太毛乃菓漢書注張晏曰有核曰菓無核曰棗菓棗見應劭曰  
 木實曰菓草實曰瓜菓此ハ之字を中置き伎能美と云べきを  
 轉して許能美と云例あり久太母能ハ木津物と云義  
 ありや傳説文と見合するも木上曰果地上曰瓜菓を  
 在木曰果在地曰瓜菓と作きて下子又有鼓以衆菓釀酒  
 曰果無殼曰瓜菓ハ八字有て今本と異あり

問何故必用菓釀酒乎答是

と云事を私記小衆菓是取集惡味毒菓而釀之以其醉  
人尤甚也之故と云を始として纂疏にも其説小依せ給  
ひて採惡毒之菓而為酒也と注させ給へれども強  
惡味の毒菓ありおりのりけめども其を以て八醞酒  
と釀し乃ち其嚴酷キビシし依て八岐大蛇の甚く吞  
酔て殺され奉まらざる有けれ其酒を以て殺させ  
給ふ可き本よりの神策まて八御在し坐さりけま  
右等中次の一書あり釀毒酒と有し泥なりたり説ひ  
有らぬども彼よりの傳ふりけり事を得知さりて  
是味氣無し傳傳世三に 子引り記傳し八鹽打之酒

書紀の八醞酒の書り醞ハ釀酒也とも久釀也とも字  
書小注せり又和名抄ハ説文云耐ニ重釀酒也漢語抄  
利加倍也西京雜記云正旦作酒八月成名曰耐酒一名  
九醞と有り諸此を夜志本表理と云所由ハ私記ハ或  
説一度釀熟絞取其汁并其糟更用其酒為汁亦更釀之  
如此八度是為純醕之酒也謂之鹽者以其汁八度絞返  
故也今世亦謂一度便為一鹽也謂之折者以其八度折  
返故也是古老之説也と有り如く正書の八醞酒ハ數  
度折返せり酒ふりし就て思寄せりハ薩摩人ハ聞  
小彼國ハ暖地トて菓實多き事穀物ハ亞り是を以て



此の御言違ハ  
口訣ノ條正モ阿羅  
正哉セリ云々如ク  
此時の御言違ハ  
サ給ハサシテ彼大蛇  
ヲ事トシテ返答セ  
サセ給ヘテ駭ノ見え  
けり由ノ新らるる  
思合サ可

邊と作共小甕能開と訓て意ハ甕上の字の如く  
其酒を盛高知ハ甕の高く身で外ハも著明く見ゆ  
方計ふハ云ひ又此甕腹満並ハ横ハ太く腹の廣  
ごりた方小酒は満せて並備ふるを云ふ古言小て此  
ふ酒ハ腹の義ふなり和名抄瓦器類小甕本朝式  
云甕美加今案音長辨色立成云大甕和名と見え又甕  
揚雄方言云自開而東甕謂之甕鳥賁反字亦作甕音  
太と有り万葉云卷大宰帥大伴卿讚酒歌十三首の中  
非嘗と有酒壺右の○吾當為汝殺蛇ハ海宮遊行  
章鹽土老翁問曰何故在此愁乎對以事之本本老翁

下文其斷蛇叙  
口訣ノ條正モ阿羅  
正哉セリ云々如ク  
此時の御言違ハ  
サ給ハサシテ彼大蛇  
ヲ事トシテ返答セ  
サセ給ヘテ駭ノ見え  
けり由ノ新らるる  
思合サ可

自勿復憂吾當為汝計之と有古事記云此亦鹽推神  
云我為汝命作善議と有事趣也語勢も相類たる所  
小て此ハ彼八岐大蛇ハハも煮殺鳴大神ハ御仇と  
申ハ非れども其老夫婦二神を憐まして其為小其  
大蛇を殺してむと詔給へりあり。○二神隨教設酒ハ  
石小素戔鳴尊乃教之曰汝可以衆菓釀酒ハ甕と有小  
應く所不故設酒と書せり小こ方有けり此  
ハ甚々事略て記されたり所ハ有けりハ此設字ハ  
力有て凡て水係れりして正書ハ乃釀ハ醞酒并作假  
殿ハ間各置一口槽盛酒以待之也と有此等の事共





被皇行天皇四十年  
御紀云龍火山  
神化大蛇當道  
有當字是ふり  
類

存妹當遠見者又  
拜我妹我妹當字  
不止振四二又

時を伺ひて必大蛇の吞盡す事して有レが此度其  
如く生兒を吞むとレして戸ノ觸レて来れルとふり備當  
とハ其標的ト成ル所ヲ直ニ指来ルを云言ハて古事  
記八十神段ノ汝將為者浴此海鹽當風吹而伏高山尾  
上ニ有ル當即是類是右同ト風ノ當ル火ノ當ル云ハ風ノ  
向ヒ火ノ向フ事ヲて適當ノ義アリ万葉ハ十九ノ春  
野ノ安佐留鳩乃妻恋ハ已我當乎人ハ令知管九十二  
妹當茂茂音十二十ノ夜不去將見妹當者十六四十  
④妹之當乃瀨社因目十一二十ノ君之當見ハ母將居  
十八ノ十五ノ小伎美我安多里半故太豆多里家礼ハと有

人ノ居所を標的トして云ハて本同言アリ此を以  
て此の當戸の義を解ベき者ナり凡テ物ノ當ルと云ハひ  
指ガふと云ハひ別當と云ハひ充行ハと云ハひレてハ當ルと云ハひ  
當某又ハ其當と云ハ語の類ハ皆此一類アリ○將吞  
兒ハ其大蛇来りて産屋ノて兒の生れ出ルを待著テ  
然為むと為ルふり是即素戔嗚大神の密策を施行ヒ  
給ふの期ハして云ハハ此を餌トして此ハ引出  
給へルふ當ル所アリ然れども實ハ正書ハ所見  
たラが如く奇稻田姬命ハ已ハ生長ラせ御在リ坐ハけ  
るふレを此小産屋の事と為ス甚ク異ナる傳ハる  
者ナり何れハても然ラる恠物を受合テ殺給ハむと

この勅を私記ふ  
遠呂知加太利  
又倍美命加太利  
と訓り此所

為させ給ふ大神の御稜威ふじ恐しとて何とも云へ  
ば更なる御事ありけり。○素戔鳴尊勅蛇曰。ハ其大蛇  
を産屋小て生出たり兒を吞むとして戶外より来り伺  
へり。子御言詔して其一途あり意念を外へ移し給へ  
る神策あり御在し坐けり然り巨塊あり故物の見  
入たる其邪念を令去さる時。假使大蛇をば殺すた  
りとも永く執念の留りて其兒小害有む事を豫め小  
所知着ての御計らひあり者ありけり。今思出は任  
澤冷庵が武將感状記に妖蛇慕女子事筑前の博多小  
富榮たる商家の女子殊色有り十四五歳の頃より三  
尺許の蛇来て其傷を離れず之を殺し捨て其者の  
歸らざる以前小蛇又来り坐す時ハ前子輪作りて

女の方を見て舌を出し身を動かす事無し行く時ハ  
一尺許後より這て遅速ハ女の歩む小從へり父母深  
く之を憂ふれども為む方無し女ハ之を苦しみて青  
和尙入唐の志ふて博多に到りて風待する間子彼高  
家崇き僧ありと聞て其旅亭に於て止る。道の候ハ  
波礼御覽せらるる法カを以て止らる。道の候ハ  
御慈悲を仰候と云へば道元法カを以て止へき覺ハ  
無し然れども希有の事あら間見置ばやと思ひ奈  
何と問はれけり。小僧より望む所なり。云て頷て其母  
彼女と共に来り聞し。違はす道元僧見て長坐ハ入  
ざら事あり此僧が前の捆を越て歸らば其子細有り  
と云はれけり。其母兼りぬを越て先小立。其其子歩  
ミ蛇女子隨ひて行く。蛇捆を越す時道元扇の要を以  
て蛇の尾を痛む程強く押へらる。下より髪剃を以  
へ蛇の首を斬て之を殺す母も黒衣の下より髪剃を以  
て蛇の首を斬て之を殺す母も黒衣の下より髪剃を以  
く蛇の首を斬て之を殺す母も黒衣の下より髪剃を以  
心を轉せし復来り。蛇の念を別物小蛇の引を此子著く  
らハ如何なる事あら。然り此小蛇の引を此子著く非

○日本書紀傳二十五

○二十四

△私記小可畏之神加  
之古支加美奈利  
と有り此

ずて ○汝是可畏之神△此素戔嗚大神ハ一柱御  
祖神の珍子と御在坐一天照大神の御弟小渡らせ  
給へれば掛よくも甚も可畏き大神小渡らせ給へど  
も其夫婦二神の為小彼八岐大蛇を斬殺し給はむと  
してハ衆菓を以て醸れりハ醗酒を進めて平げさせ  
給はむ御謀の御在坐故小尋常の國神の如く昇  
下らせ給ひて此御言を詔給ひ姑く彼小蛇を吞むと  
指来れり念を外小移さし其醉睡らむ虚を伺ひて  
謀伐せ給はむ御結播小ころハ御在坐けり一第三  
一書見えたり其夫婦の言ハ彼大地每頭各有石松兩脇有山甚可畏矣と申

せり子因て更小御言小發ハ一給へり御事とあむ見  
えたりけり傳廿三 百十 小云らる如く此ハ巖忌イサヤ  
妖蛇の巨塊あり格別あり事ハ有きども其餘小  
も例有り欽明天皇前記小秦大津父が言を載て臣高  
伊勢高價来還山逢二狼相闘汚血乃下馬洗漱口手祈  
請曰汝是貴神而行麁行儻逢獵士見禽尤速乃抑止相  
闘拭洗血毛遂遣放之俱令全命と有ハ狼を指て汝是  
貴神と云らるり其六年御紀小膳臣巴提便が小兒の  
亡けり時小天曉始求有虎速速跡臣乃帶刀環甲尋至巖  
岫岫後刀曰敬受絲綸勞陸海攝風沐雨籍草班荊者為

古事記朝倉宮段  
天皇於是惶畏而白  
恐我大神一事主  
神申答へる類は更  
あり

愛其子令紹父業也惟汝威神愛子一也今夜兒亡追蹤  
覓至不畏亡命欲報故來既而其虎進前開口欲噬巴提  
便忽申左手執其虎舌右手刺殺剥取其皮還と有る此  
ハ虎小對ひて汝威神と云ら小て万葉十六三十小韓  
國乃虎云神半生取尔ハ頭取持來其皮半多弥尔刺  
と詠と有る如く人小其皮を剥取らる程の物不が  
り其可畏キ威有を以て神とハ云らあり此可畏之神ハ常小神と  
皇との御事掛麻久毛恐伎云と申奉り又欽明天  
皇九年御紀百濟國より奏言ハ伏願可畏天皇と有る  
本注ハ西蕃皆稱日本天皇可畏天皇と有るハ實小  
尊く貴き御上申奉れらるハ其ハ異子  
給ひて其心を傲らる此方を昇下りて然詔  
給へる状小

待成

爰後漢賦恭傳漢  
兵真可畏也

通證給へる大神の神策小ふむ有けり此可畏の字ハ  
春秋傳君子在位可畏を有を用ひさせ給へる  
不備右の蛇又ハ狼或ハ虎をしも可畏之神と云ハ本  
事りの事よて記傳三七小人ちるぬ物ハ雷ハ常小  
鳴神神鳴ふと云へハ更小云す龍樹靈狐ふどの類  
も勝れて靈一き物小て可畏ければ神ありと云れば  
るが如くみて神武天皇戊午年御紀小進至熊野荒坂  
津亦名丹敷浦因誅丹敷戸畔者時神吐毒氣人物咸瘁と有  
る古事記子ハ到熊野村之時大熊鬚鬚出入即失之見  
え其序小化熊と有れば其丹敷戸畔の化れらあぐら  
其態を神とハ云らるり又景行天皇二十七年御紀小

又推古天皇二十六年御紀云是年河邊臣於安藝國令造柏山山見山材復得好材以名將伐時有人曰霹靂水也不可伐河邊臣曰其雖言神也豈逆皇命耶多奈帝命遣入夫令伐則大雨雷電之食河邊臣宗劾曰雷神也犯人夫言傷我身而仰待之雖十餘年不復能伐河邊臣曰即取魚林之云

日本武尊の到吉備以渡兗海其處有惡神則殺之亦比至難波殺柏濟之惡神と有ハ水獸又ハ蛇蝎の類を神とハ云々あり其四十年の下小然日本武尊披烟凌霧遙徑大山既達千峰而飢之食於山中山神令苦王以化白鹿立於王前王異之以一箇蒜彈白鹿則中眼而殺之略中至膽吹山山神化大蛇當道爰日本武尊不知主神化蛇之謂是大蛇必荒神之使也既得殺主神其使者豈足求乎略下有古事記とハ少異同も有と雖も其主神ハ主神として其化ハる眼前の状を以て鹿を蛇と云ハ神とい為るあり如此く上古ハ眞の神ハ非

ずと雖も然る神ハ一く可畏き威の有る物をハ皆神とハ云けり但皇極天皇七年御紀小東國不盡河邊常世神也祭此神者致富與人還少由是加勤捨民家財寶祭常世神者貧人致富老人還少由是加勤捨民家財寶陳酒陳粟六畜於路側而使呼曰新富入未都鄙之人取常世出置於清座歌儻求福棄捨珍財都無所益損費極甚於是葛野秦造河勝惠民所惑打大生都多其巫覡等恐休其勸祭時人便作歌曰禹都麻佐波柯微騰母柯微騰枳舉曳俱屢騰舉預能柯微宇宇智岐多麻須母此虫者常生播樹或生蔓椒其長四寸餘其大如頭指許其色綠而有黑點其類全似養蠶と有ハ巫覡の妖言を設け尋常の小虫の人の知ざるを幸ハ常世神と号けたる不化ハ非ずて○敢不饗乎ハ阿閑氏阿閑世邪良米の例子ハ非ず

○日本書紀傳二十五  
○二十七

夜登詔給比氏と訓附べし饗の義ハ已小傳十四九十五云り此ハ大蛇子汝ハ可畏き神也在れハ禰所

無<sup>けれど</sup>く郷<sup>モテナ</sup>を進<sup>シ</sup>のて持<sup>シ</sup>賞<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>詔<sup>シ</sup>給<sup>ヘ</sup>へ<sup>ル</sup>此<sup>ハ</sup>郷<sup>ノ</sup>食<sup>ノ</sup>字<sup>ニ</sup>  
甚<sup>ク</sup>力<sup>ヲ</sup>入<sup>テ</sup>見<sup>ル</sup>可<sup>ク</sup>敢<sup>テ</sup>字<sup>ハ</sup>如<sup>ク</sup>傳<sup>テ</sup>十五<sup>ノ</sup>卷<sup>ノ</sup>九<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>四<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>  
と注<sup>シ</sup>て憚<sup>ラ</sup>ズ強<sup>テ</sup>物<sup>事</sup>を成<sup>ス</sup>意<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>バ<sup>シ</sup>進<sup>ル</sup>為<sup>ニ</sup>也  
此<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>少<sup>ク</sup>憚<sup>ラ</sup>可<sup>キ</sup>を犯<sup>ス</sup>義<sup>ハ</sup>有<sup>リ</sup>○以<sup>テ</sup>八<sup>ノ</sup>麩<sup>ノ</sup>  
酒<sup>ノ</sup>金<sup>ノ</sup>澤<sup>本</sup>本<sup>ハ</sup>八<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>を脱<sup>タ</sup>り若<sup>シ</sup>始<sup>メ</sup>り然<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>来<sup>ル</sup>ら<sup>ズ</sup>  
ら<sup>ズ</sup>母<sup>ハ</sup>比<sup>能</sup>佐<sup>神</sup>此<sup>ハ</sup>訓<sup>ハ</sup>くや然<sup>レ</sup>れ<sup>ト</sup>も上<sup>ニ</sup>  
子<sup>ハ</sup>已<sup>ハ</sup>八<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>有<sup>リ</sup>正<sup>書</sup>子<sup>及</sup>至<sup>得</sup>酒<sup>頭</sup>各<sup>一</sup>槽<sup>飲</sup>と作<sup>シ</sup>  
熟<sup>田</sup>縁<sup>起</sup>八<sup>ノ</sup>戸<sup>分</sup>頭<sup>飲</sup>と有<sup>レ</sup>ハ猶<sup>ハ</sup>八<sup>ノ</sup>麩<sup>酒</sup>と有<sup>ル</sup>也  
甚<sup>ク</sup>勝<sup>ル</sup>ル<sup>レ</sup>け<sup>ル</sup>○每<sup>口</sup>ハ正<sup>書</sup>小<sup>其</sup>大<sup>蛇</sup>の<sup>状</sup>を云<sup>フ</sup>小<sup>ノ</sup>  
頭<sup>尾</sup>各<sup>有</sup>八<sup>岐</sup>と記<sup>ス</sup>ル古<sup>事</sup>記<sup>ハ</sup>身<sup>一</sup>有<sup>八</sup>頭<sup>八</sup>尾<sup>と</sup>  
書<sup>セ</sup>り其<sup>ハ</sup>八<sup>頭</sup>の<sup>爲</sup>ハ八<sup>麩</sup>酒<sup>を</sup>醸<sup>給</sup>へ<sup>ル</sup>を各<sup>彼</sup>八<sup>戸</sup>

の假<sup>殿</sup>小<sup>各</sup>一<sup>頭</sup>を入<sup>レ</sup>の其<sup>口</sup>每<sup>小</sup>一<sup>麩</sup>酒<sup>を</sup>充<sup>給</sup>へ<sup>ル</sup>  
を云<sup>フ</sup>○沃<sup>入</sup>口<sup>訣</sup>沃<sup>濯</sup>也と注<sup>セ</sup>レバ舊<sup>キ</sup>小<sup>ノ</sup>  
從<sup>ヒ</sup>し曾<sup>シ</sup>岐<sup>入</sup>給<sup>布</sup>と訓<sup>ベ</sup>し然<sup>ラ</sup>子<sup>私</sup>記<sup>ハ</sup>每<sup>口</sup>沃<sup>入</sup>  
入<sup>ト</sup>有<sup>ル</sup>下<sup>小</sup>久<sup>知</sup>期<sup>止</sup>尔<sup>以</sup>伊<sup>留</sup>と書<sup>シ</sup>金<sup>澤</sup>本<sup>子</sup>も  
沃<sup>入</sup>を以<sup>テ</sup>伊<sup>禮</sup>給<sup>布</sup>と訓<sup>ル</sup>ハ射<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>義<sup>ハ</sup>可<sup>ク</sup>儲<sup>万</sup>  
葉<sup>三</sup>七<sup>下</sup>子<sup>白</sup>雲<sup>母</sup>伊<sup>去</sup>波<sup>伐</sup>加<sup>利</sup>ふと云<sup>フ</sup>發<sup>言</sup>の<sup>伊</sup>  
を助<sup>字</sup>の<sup>如</sup>く思<sup>フ</sup>人<sup>も</sup>有<sup>レ</sup>ども其<sup>ハ</sup>射<sup>字</sup>の<sup>義</sup>子<sup>ハ</sup>  
て弓<sup>ヲ</sup>射<sup>ル</sup>ふと云<sup>フ</sup>射<sup>ノ</sup>等<sup>一</sup>其<sup>適</sup>當<sup>ト</sup>成<sup>ル</sup>所<sup>有</sup>  
て一<sup>途</sup>小<sup>往</sup>を云<sup>フ</sup>小<sup>同</sup>ト<sup>ク</sup>此<sup>亦</sup>も其<sup>大</sup>蛇<sup>の</sup>咽<sup>ノ</sup>  
喉<sup>小</sup>通<sup>徹</sup>一<sup>入</sup>給<sup>ヘ</sup>る義<sup>ヲ</sup>を以<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>伊<sup>留</sup>と訓<sup>ビ</sup>習<sup>ノ</sup>有<sup>リ</sup>

ふる可其餘小古書中多伊立伊隱伊添の義ありて何れも右小云る如く又曾又曾之岐伊流と云時ハ水子て物を濯ぐが如く沃ぎ懸て口中小送らを云ふ万葉今も口漱ふと云も右小同一万葉五十三  
七小鹹鹽遠灌知布我何其等久と有る灌是して須二  
久又曾久ふど同言ふる事已小傳十三百二小云る  
が如し〇飲酒而ハ佐祁袁能美兵ふり万葉三一十小  
賢跡物言從者酒飲而醉哭為師益有良之又夜无玉跡  
言十方酒飲而情乎遠尔豈若目八目ハ一又默然居而  
賢良為者飲酒而醉泣為尔尚不如来ふど有て古子酒

△大蛇謂之羽羽有

△就て云いハ此の  
大蛇を斬給へり由

を久年とハ云ざり事已小先師の説の如し〇抜劔  
ハ正書及熱田縁起共乃拔所帶十握劔と有る劔是  
に下此其断蛇劔号曰蛇之麿正と有ハ此時の御事小  
依て其号と成れなり又第二一書小蛇韓鋤之劔  
有ハ其形容を以て云はて一ハ其劔の長を云ひ一  
ハ其徳を以て号け一ハ其形子依れる称ありを此ハ  
下小其事を委曲小記さるハ故小此ハ唯子抜劔と  
ハ書れたらら〇至斬尾時ハ第三一書の如く斬頭  
斬腹其斬尾之時ふど云べきを此ハ其至字を以て  
頭より腹子漸ニ斬下せる事を知らせたり者あり

正書曰寸斬其蛇至尾と云も其有意ハ同トキコトシテあり  
其ハ頭とも腹とも云ず上より寸斬る由あり小此ハ  
第三一書子合て委レ書一様と云べレ 凡て物ハ委  
ても意の足ハざる所有る物多きを此又ハ曲少飲  
キ過たり如くして其事を中ニ詳シキ為り  
ハ飲字加祁伎と訓む事傳世ニ百十云フガ如シ  
此字全澤本ニハ許煩流と訓ミ又正書ニも加久ニ  
讀て其左ニ許煩流と有ルハ次の第三一書ニありハ  
其訓を注さずと雖も右も同トル可クけテ此ハ許  
煩流と訓フ此ハ今も俗く遍く云事ニあリ古言と通  
えて壞字の義あり仁徳天皇四年御紀ニ宮垣崩而不

其下至本武皇  
子改名曰宮子雅知  
其ハ

造茅茨壞ニ以テ不レ嘗フ万葉ハ九十秋田ニ蒞シ借廬ニ毛未壞者コト  
十一ニ十ニ小ニ懇田ニ之板ニ回リ橋乃壞者コト見ル花の  
散リ水ノ覆リをモ許煩流と云ふト同ト其ハ自  
許煩都許煩氏ノ活ル事誰モ知ル如シ割リ而  
視之ハ佐志佐伎氏美曾那波須礼婆と訓ム事ハ傳  
世ニ百十云フガ如シ  
尾視之中有一劍ト有ト同ト事ト文章ノ異レルハ此  
此ハ劍ハ在ル尾中如シ是號草薙劍正書曰  
此所謂草薙劍也ト有ル世ニ聞エルハ草薙劍ト云事  
ありと此ハ其時ニ已ニ草薙劍ト號シケル如シ







討終と有る見合する故に其於波里を終ヲリの事と思ふ  
 りれども終に衰波理にて假名違へれば諾ひ難し  
 子張と云ふ常の事あるが大張とも何と云れざ  
 り可き謂尾張者音之訛也と云るを以て大の於の小  
 の衰易異れり事をあむ知べりけり然れに此説其  
 國名の才據と聞えたり猶思合す可き神名式と  
 名帳正一位捺名大明神と書し今捺名山と云れ  
 八捺字を誤ハハ支命亦名元湯彦命速  
 を見らば中殿彦白支命亦名元湯彦命速  
 日命西相殿宇摩志麻治命有ハ偽湯彦命速  
 從三位針名天神張國愛市郡針名神社本國神名帳火  
 明命左京神別下天孫子檜前舍人連大明命十四世孫  
 氏

猶此尾細根命の  
 妻下より尾張部  
 部所より云べし

波利那乃連公之後也有て世教合れば同人て尾  
 張連の同族たり若て右の天火明命と申すハ饒速日  
 命流ハ物部氏命の流ハ尾張連あり申すハ饒速日  
 の裔ハ物部氏命の流ハ尾張連あり申すハ饒速日  
 ハ非ハ物部氏命の流ハ尾張連あり申すハ饒速日  
 針名真若比又神名式子備前國野郡尾針神社尾治  
 枚延曆十二年備前國野郡尾針神社尾治  
 姓氏録河内國神別天孫若犬甘氏有る  
 引天孫命之後也有る調一本綱子作れ右世  
 命有るハ右ハ三を六子誤り尾綱を尾調子偽れ右世  
 者有る又通證と引松下見林説尾張國草薙劍出  
 自大蛇而留此國故名と云ハ尾針と云事と云や然  
 此御劔ハ本より天照太神の御物にて巳子天石

皇行天皇四十年  
御紀早公尊向東  
之歲停尾津濱而  
進食是時解一劍  
置於松下遂忘而  
去至於此劍猶存  
故歌曰云々有云此  
更

窟隱の御時天目一箇命の鍛冶一仕奉らば一眞の  
御劍多々事已傳十九百六十三五十八丁注るべ  
如くふれば協はず又近頃其説を非として彼尾羽張  
の切りて尾張と成れる由云れし其も僻事なり  
寛平熱田縁起小倭武尊從駕還著宮酢姫宅于時獻大  
饌宮酢姫手捧玉盞以獻彼姫所著衣裾染於月水倭武  
尊覽之即歌曰麻蕪義乎波理乃夜麻等許知其知能夜  
麻乃如此由略下有八此時日本武尊其劍を携へて歸  
來給ふと申す迄して未鎮奉れり以前に已く國名に  
ハ如何ハ成ぬ可き又古事記小到坐尾津前一松之許

先御食之時所忘其地御刀不失猶有尔御歌曰表波理  
迹多陀迹向迎幣流表都能依岐那流比登都麻都阿勢  
哀略下有八彼宮黃媛の許御劍を置てハ来坐つれ  
ども其ハ御別の御時残留め給へるのこり有け  
れ未幾許も非れば其を以て國名如何ハ号く可き然色  
ハ尾張と云名義已の草薙劍由ざる事此を以知べし  
又神名式子山田郡尾張神社本國神名帳從三位尾  
張天神一本尾張田子作り又一本子針子作り天野  
信景が集説子今在春日井郡味田莊山針村此社祭天  
香語山命本州中央之地也蓋國名起於此處歟尾張其

合見之方葉十三十一  
小治田之年魚道之  
水卒ふとも

實小壑也と云らハ續紀小神護景雲二年十二月甲子  
尾張國山田郡人從六位下小治田連藥等八人賜姓尾  
張宿禰と有ら此子因れハ説小て甚諾尤事あり又  
秦鼎也尾張蓋邑村名即小治田義今有高治平治小治  
等村と云れハ其小壑と云らあむ甚宣十りけり  
云ら風土記の説ハ異ありと雖モ此方近キヤ後  
人其佳シヲを取ベト又通證ハ王木某説ヲ載リヤ  
或謂一國之地形智多郡張出南海而為國尾故名蓋此  
劍而留在尾張國亦自然ノ妙契也ト有リ國尾の張出  
云有リ此ハ大和國葛上郡の地名ナり其ハ謂ユり  
高天山の山尾の張出ル云レ人ノ名ナり其地ニあり然レ天  
孫本死シ葛城尾治置姫ト云レ人ノ名ナり其地ニあり然レ天  
大國尾の張出ル表波理途多陀途牟途幣流の御歌ニあり  
十右ニ舉ル九ニ表波理途多陀途牟途幣流の御歌ニあり

合へり心ヲ其ハ尾張を知多郡と見ル時ハ尾津ハ  
其ノ向ヘり伊勢國桑名郡ありけきバ此を尾出と云  
て同義ナらニ云フ○吾湯市村ハ景行天皇五十一年  
御紀ニ年魚市郡と有リ但當昔末郡名の御定ハ非レレ  
ども後ニ云フ所ヲ始メ及ビ不シて例ノ書サれタ者ハ不  
り熱田縁記ニ倭武尊於甲斐酒折宮有戀宮酢姫即歌  
日阿市知何多比加弥阿禰古波和例許武牟止止古佐  
留良牟也阿波禮阿禰古乎ト有ル是ハあり万葉三十九  
櫻田部鶴鳴渡年魚市方鹽干二家良進鶴鳴渡七十  
丁年魚市方鹽干家良思知多乃浦尔朝榜舟毛奧ハ  
依所見十三十一丁子小治田之年魚道之水平間無曾人

者拖云時自久曾人者飲云下略ふと有が如く古くハ阿  
 由知と云けりあり知名抄郡名ハ尾張國愛智阿伊  
 有ハ音便ふり同抄也江國郡名ハ愛智を衣知と有ハ  
阿由知の言の切れりハ非り名義  
ハ今更ニ考ふ ○熱田ハ神名式ハ尾張國愛智郡熱田  
ハ田無 神社名帳ハ正一位勲一等熱田大神宮本  
作大 名神と有る是あり此神宮の御事ハ己ニ傳廿三二百  
丁ニ註ハ奉れりを猶其委ハ事ハ廿六二十ニ云ベ  
 一寛平縁起ハ己而倭武尊奄忽遷化之後宮酢姫不違  
 平日之約獨守御床安置神劍光彩亞日靈驗著聞若有  
 禱請之人則庶感同於影響於是宮酢姫會集新舊相議

曰我身衰老昏曉難期事須未暝之前占社奉遷神劍衆  
 議感之定其社之地有楓樹一株自然炎燒倒水田中光  
 焰不消水田尚熱仍號熱田社と所見たり是其熱田と  
 云郷名の起原あり然る小尾張風土記ハ熱田社者昔  
 日本武尊命即謂宮酢姫曰此劍神氣互奉齋之為吾形  
 影因以立社熱田郷為名也と有ハ本末違へり似た  
 り右の楓樹の焼て水田ハ休れたる事ハ因て熱田と  
 云ハ地名とも成り社号とも成り終ハ郷名とも成れ  
此事小説て説有り傳廿二見ハ  
 りけりと和名抄郷名ハ愛智郡厚田ハ作れり  
 田を字ニ就て後ニ設けたり者の如く思ハ非り熱  
 化て地名不ハ唯假初の事ハ起まり者不ハ右

受春の深山路弘明二年二月十八日の下は松田宮に昔日本武尊を奉り給ひ一時是の火の掛て尊を授け給ひて侍らるる掛本焼て侍らるる田中の火焼く成りたり其時天邊に如之候て草を焼て道に其其の草を焼て道に申し其草を焼て此御社に祀りて侍らるる侍り神と御坐し坐り云々と有て此の御社の御坐しを彼野火に焼て然れども此の御坐しを今も傳り侍り侍り

の縁起の説ハ難捨り其上厚田の厚の何の義と  
 為る膏腹の地を然云例をも見ず又薄田と云事も聞  
 あり○祝部ハ侍在の義にて神社に侍るふ人を云  
 称あり此ハ甚古くより有る職と聞えて神武天皇已  
 未年御紀に和珥坂下有居勢祝者脍見長柄丘岬有猪  
 祝者と有巨勢神又猪ハ借字にて井神小仕ふる神部  
 あり一あり可一仲哀天皇八年御紀南浦神崇有る所  
 天皇則禱祈之以披抄者倭國菟田人伊賀彦為祝令  
 祭則取得進と有る御禱祈ハ外に在て御親此を為給  
 ひ其神ハ近く祝を附置て給ひて其祭祀を主とし  
 の給へる此を以て波布理の侍在る事を知へる神

功皇后元年御紀小竹祝共天野祝共為善友履神天  
 皇五年御紀小居島伊井諾神託祝曰云云欽明天皇十  
 七年御紀小昔在大皇大泊瀬之世略命神祇伯受策於  
 神祇祝者巡神語報曰云云之有を始として猶此彼有  
 り又古事記伊邪河宮段に近於海之御上祝以伊都久  
 天之御影神又玉垣宮段に若坐出雲之石碕之曾宮草  
 原色許男大神以伊都玖祝大延中と有る此二ハ伊都  
 久祝と續けらるり万葉四四十小味酒三輪之祝我忌  
 杉手觸之罪歟君二遇難寸十五祝部等之齋經社  
 之黄葉毛標繩越而落云物年十九三十小任吉尔伊都

久祝之神言等行得毛来等毛船波早家無ふど見え九  
 リ此等を彙めて思ふ先神を齋奉るを職として其  
 神託をも受奉り人<sup>子</sup>神の御心を傳へて誠しむ  
 を以て任と為る事と所見たり職員令神祇官祝部義  
 解と謂為祭主贊辭者也其祝者國司於神戶中簡定即  
 甲太政官若無戸人者通取庶人也と所見たり然れと  
 且上古より有来り止事無き御社の祝者ハハハ然ら  
 可き由緒有て仕奉れりあれハ神戸を取まらふハ非  
 ず此祝字ハ神祇令神祇官中臣宣祝詞の義解と謂宣  
 祝詞也と有を用ひる者あり欽明天皇二十三  
 年御紀ハ馬飼首歌依り子<sup>子</sup>母の請子依て付祝人使  
 罪有ける時其

作神奴乃依母請許没神奴と有る其  
 神奴ハ其祝人子屬く賤しき者を云 備神より其祝を  
 乞給ふ事ハ其御許令侍て令祭給ふむとの御事ハ  
 仁崇神天皇七年御紀ハ是夜夢有一貴人對五殿戸自  
 称大物主神曰天皇勿復為愁國之不治是吾意也若以  
 吾兒大田田根子令祭吾者則立平矣略即以大田田根  
 子為祭大物主大神之主と有る是即右ハ引る万葉ハ  
 謂ゆハ三輪之祝の始祖ナリ又尾張風土記ハ丹羽郡  
 吾縵郷卷向珠城官御宇天皇品津別皇子生七歳而不  
 語乃後皇后夢有神告曰吾多具國之神名曰阿麻乃弥  
 加都比女吾未得祝若為吾竟祝人皇子能言亦是壽考



略<sub>下</sub>と有<sub>レ</sub>其祭を主<sub>レ</sub>祝人を請<sub>ハ</sub>セ給<sub>ヘ</sub>テ又肥  
前風土記基肆郡姬社郷條<sub>レ</sub>昔者此川之西有<sub>レ</sub>荒神行  
路之人多被<sub>レ</sub>殺害<sub>レ</sub>半凌<sub>レ</sub>半殺<sub>レ</sub>于時<sub>ト</sub>求<sub>レ</sub>宗由<sub>レ</sub>兆云<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>筑前  
國宗像郡人<sub>レ</sub>珂是古祭<sub>レ</sub>吾社若<sub>レ</sub>合願者<sub>レ</sub>不起<sub>レ</sub>荒心<sub>レ</sub>覓<sub>レ</sub>珂是  
古令<sub>レ</sub>祭神社<sub>ト</sub>見えたるも右小目<sub>ト</sub>此等<sub>ヲ</sub>を以<sub>テ</sub>七被  
布理<sub>ハ</sub>侍在<sub>ル</sub>君側<sub>ニ</sub>在<sub>ル</sub>人を侍者<sub>ト</sub>云<sub>レ</sub>意味<sub>ハ</sub>同  
しき事を曉<sub>リ</sub>つ可<sub>キ</sub>者<sub>アリ</sub>カ<sub>レ</sub>但祝詞<sub>式</sub>小神主祝  
上<sub>ノ</sub>神主の職<sub>有</sub>リ其神主<sub>ト</sub>云<sub>ハ</sub>上古<sub>ノ</sub>政事<sub>ヲ</sub>取<sub>リ</sub>  
程<sub>ノ</sub>人<sub>ヲ</sub>云<sub>テ</sub>國造<sub>ノ</sub>類<sub>是</sub>多<sub>ク</sub>由<sub>レ</sub>巳<sub>ノ</sub>祝詞<sub>講</sub>義  
禱<sub>ノ</sub>請<sub>ノ</sub>事<sub>ノ</sub>如<sub>シ</sub>祝部<sub>ハ</sub>其國<sub>務</sub>子<sub>ハ</sub>抱<sub>リ</sub>ラ<sub>ズ</sub>唯祭<sub>祀</sub>  
稱<sub>ト</sub>見えたり右小引<sub>カ</sub>故<sub>ニ</sub>神<sub>子</sub>親<sub>昵</sub>し<sub>テ</sub>謂<sub>ヲ</sub>を以<sub>テ</sub>云  
文<sub>共</sub>を以<sub>テ</sub>味<sub>ハ</sub>ハ<sub>レ</sub>可<sub>シ</sub>○熱<sub>日</sub>祝部<sub>ト</sub>云<sub>ハ</sub>寛平<sub>縁</sub>起

凡奉祀神<sub>叙</sub>於<sub>レ</sub>此國<sub>總</sub>縁<sub>宮</sub>酢<sub>姫</sub>其<sub>建</sub>稻<sub>種</sub>公也<sub>宮</sub>酢  
姫<sub>下</sub>世<sub>之</sub>後<sub>建</sub>祠<sub>崇</sub>祭<sub>之</sub>魂<sub>火</sub>上<sub>姉</sub>子<sub>天</sub>神<sub>其</sub>祠<sub>在</sub>愛<sub>智</sub>  
郡<sub>火</sub>上<sub>邑</sub>以<sub>海</sub>部<sub>氏</sub>為<sub>祝</sub>海<sub>部</sub>是<sub>尾</sub>張<sub>氏</sub>之<sub>別</sub>姓<sub>也</sub>稻<sub>種</sub>  
公<sub>者</sub>火<sub>明</sub>命<sub>十</sub>二<sub>世</sub><sub>代</sub>之<sub>孫</sub>尾<sub>張</sub>國<sub>造</sub>乎<sub>止</sub>與<sub>命</sub>之<sub>子</sub>而<sub>母</sub>  
尾<sub>張</sub>大<sub>印</sub>岐<sub>之</sub>女<sub>真</sub>敷<sub>刀</sub>婢<sub>命</sub>也<sub>實</sub>尾<sub>張</sub>氏<sub>之</sub>祖<sub>也</sub>因<sub>茲</sub>  
明<sub>神</sub>為<sub>尾</sub>張<sub>氏</sub>神<sub>便</sub>以<sub>尾</sub>張<sub>氏</sub>人<sub>補</sub>神<sub>主</sub>祝<sub>部</sub>等<sub>職</sub>也<sub>ト</sub>  
見<sub>元</sub>たる是<sub>あり</sub>右<sub>ノ</sub>氷<sub>上</sub>姉<sub>子</sub>天<sub>神</sub>ハ<sub>巳</sub><sub>三</sub>十<sub>五</sub>小<sub>引</sub>カ  
縁<sub>起</sub>小<sub>倭</sub>武<sub>尊</sub>於<sub>甲</sub>斐<sub>酒</sub>折<sub>宮</sub>有<sub>戀</sub>宮<sub>酢</sub>姫<sub>即</sub>歌<sub>曰</sub>阿<sub>由</sub>  
知<sub>何</sub>多<sub>比</sub>加<sub>弥</sub>阿<sub>祢</sub>古<sub>波</sub>云<sub>有</sub>レ<sub>其</sub>宮<sub>酢</sub>姫<sub>命</sub>あり<sub>事</sub>  
ハ<sub>知</sub>ル<sub>レ</sub>ハ<sub>たり</sub>神<sub>名</sub>式<sub>ト</sub>愛<sub>智</sub>郡<sub>火</sub>上<sub>姉</sub>子<sub>神</sub>社<sub>ト</sub>有<sub>ル</sub>

参考<sub>三</sub>本<sub>無</sub>尾<sub>張</sub>  
三<sub>命</sub>世<sub>二</sub>十<sub>四</sub>也

此神神の事又傳世六  
 記ハ仲天皇四乙  
 亥年始御鎮坐と  
 見天鎮座記云も  
 水二宮三座宮黃  
 姫命皇神宮御年  
 奉之至廣野姫天  
 皇御年奉遷遷回  
 火高此時合祭神  
 日本武尊也二座御  
 靈形御宮而一箇  
 坐と有り舊記云  
 持統天皇四庚寅  
 年水上宮元宮遷  
 今宮地と有り此  
 まで日本武尊ハ  
 一と後日名祭れ  
 知然心も御夫婦  
 の御神の位を祀ら  
 るも由也と記して思ふ  
 其今宮地云々火高  
 日本武尊日本武尊の  
 御在坐を女神と  
 水より此子移奉り  
 て日本武尊と一所  
 置奉らと云々可

是より本國神名帳ハ正二位火土嬬子明神と有り  
 以海部氏為祝ハ天孫本紀の天火明命六世孫建田背  
 命の下子神服連海部直丹波國造但馬國造等祖と有  
 凡バ此命より海部氏ハ支別たろふり是を以て海部  
 是尾張氏之別姓也とい云り又十六世孫尾張治多與志連大海部直等祖と云  
波國ハ由有ヨリ非ヨリ和名物郡名ハ丹波國氷上比加三ト見え神名式ハ天田郡天照玉神社御在坐ハ  
饒速日命子渡ラセ給ヘラオト思存ト事有テ已小傳  
二十一卷五十一 火明命十二代之孫ハ天孫本紀ハ十二  
一丁小云リ 世孫建稻種命と有子合り但秦鼎ハ參考小引子千秋  
 家譜小依小尾張氏大祖神天照國照彦天火明櫛玉饒

速日命此初祖より次子天香語山命二世あり次子天  
 忍男命二世あり天孫本紀ハ此間子天村雲命の名  
 出で此より一<sup>の差有</sup>世に成れり次子建額赤命三世あり次  
 子建筒草命四世あり次子建田背命五世あり次子建  
 諸隅命六世あり次子倭得玉命七世あり次子彦余與  
 曾命八世あり次子小繼命九世あり次子平止與命十  
 世あり次子建稻種命妹小止女命又名宮十一世あり  
雖ハ此ハ古の天村雲命を除きて 饒速日命より數  
建稻種命迄 子故子十二代と成り尾張國造乎止與命ハ子國  
 造本紀子尾張國造志賀高穴穗朝以天別天火明命十

在奉事以前

世孫小止與命定賜國造と有て天孫本紀第十一世と有と同舊事紀の中よて一世の差有ハ右ニ云ク千秋家譜の如キ傳の異ニ在ケルヲ多ク可シ若テ其子建稻種命ハ同紀ニ此命迹波縣君祖大荒田女子玉姬為妻生二男一女と有て尾網根命ハ其子ニて十三世孫ナリ然ルヲ縁起ニ倭武尊還向尾張到篠城進食之間稻種公備從一本策駿馬馳來啓曰稻種公ハ海亡及倭武尊ハ聞悲泣曰現哉現哉ハ有レ已ニ亡給ヒルヲ故ニ小止與命ナリ尾網根命ハ謂フク嫡孫ニ承祖と云狀ニ其國造職を繼テ大神ニ世ニ仕奉ル事ナリ

ハ成レルヲけル者ナリ所以テ縁起ニ小止稻種公ハ尾張國造ニ乎ハ興命ト記レルヲ也但其尾張國造ニ仕奉ル事ナリ成務天皇五年御紀ニ令諸國ニ以國郡立造長縣邑置稻種ト有ル其時ニ幸シテ此ノ國ニ立造五年後ノ事ナリ也其以前ニも然ル名目ニハハ非ズ其地ノ豪族ト已ニ國造ト因テ茲明神為尾張氏神ハ上ニ凡奉祀神ニ於此國總緣宮ニ昨ニ建稻種公也ト有ル應ヘ中ニ建稻種公者大明命十二代之孫也實尾張氏之祖也ト有テ承テ其總括ノ文ナリ尾張氏神ト民部省式ニ謂フリ定氏社ト云是レ其神ト申ス有ル其兵人を以て奉仕ル神ト云事ニて其祖神ノ謂フハ非ズ天孫本紀ニ小饒速日命六世孫伊香色雄命ト遷建布都大神社於大倭國山邊郡石上邑則天祖授饒

連日命自天受來天璽瑞寶同六藏齋乎曰石上大神以  
為國家亦為氏神宗祠為鎮有其祖宇摩志麻呂命  
の事を云る凡厥奉齋瑞室而祈鎮壽祚兼崇靈敏而  
治護國家如此之事裔孫相承奉齋大神有對へて  
氏神と云るを合せ考可以尾張氏人補神主祝等  
職也千秋家譜成務天皇六年始置諸國郡縣邑造  
長首渠以止典命定尾張國造專主於當國神祇異國  
造國作國司之初亦曰神主有是不於此中甚愛  
たき事不む有けり其國造の當國の神祇を主とすと  
云事ハ國勢の第一ふして神事と公事を相別たす社

奉れ古の狀て朝貴の大臣と雖も然り天孫本紀  
宇摩志麻呂命其子彦由支命の條ニ為申食國政大  
夫奉齋大神と有て天下の政務を執申す程の人  
悉も然有しりけり次は國造を國作の義と為るハ  
如何なりれも亦曰神主と云事甚と愛たし然るハ續  
紀ハ大寶二年二月戊戌朔庚戌是日為班大幣馳驛追  
諸國國造等入京と有る大幣ハ謂ハ謂ハ二月祈年祭  
を云たり其詞ハ集侍神主祝部等諸と有を以て其國  
造ハ當る事を見可く又靈龜二年二月丁巳出雲國  
國造外正七位上出雲臣果安齋畢奏神賀詞略從果安

延暦十七年三月  
日の大政官符  
小國造兼帶  
神主と有る正  
しく此を云々

至祝部一百一十餘人進位賜録各有差と有る此を以  
て國造果安ハ神主ハ當る事自餘ハ祝部對へ見て  
此知る事多シ兼和十四年三月七日太政官符望請  
依太政官去弘仁二年九月二十三日同三年五月三日  
而度符旨永停止公役專勤神事者也と有て此より以  
來ハ神主祝部ハ國勢の公役ヲ預らず唯神社の祭祀  
の之に任奉る事ヲ成テ漸次ハ神世の古儀ハ廢絶九  
者ハ亦む有けり然して上ヨリ引テ職員令神祇官  
中筋定即中神祇官若無戸人者通最度人也と云ひ民  
部者式ハ凡諸社神主祿宜祝者擇八位以上及六十以  
上堪事者補之雖元來定氏之社并神戶百姓而盡八位  
及六十以上然後及壯年白丁即免課役と有る如く神

主祝部ト雖も公事ハ預るが故ハ神戶の百姓  
を以て定申さる事ハ成化あり右ハ定兵社と  
有ハ上ヨリ謂ゆる尾張氏人の熱田神宮ハ社奉り物部  
氏人の石上神宮を齋奉るハ更なり又大神大物主神  
社を其御末の大神朝臣以て祭るハ春日祭神社を  
其天兒屋命の裔多ク中臣朝臣をして齋りしめらる  
云々類を○所掌ハ都加佐掃理麻都流と訓べ即神祭  
の主として為て仕奉るを云ハ然る物として常々ハ所祭と  
云を其ハ唯神靈を祭祀の方のこゝに云て此ハ所掌と  
云ハ神寶の事ハ係る所置る御紀の文法より垂  
仁天皇二十六年御紀ハ勅物部十市根大連曰略汝親  
行干出雲亘檢校定則十市根大連校定神宝而分明奏  
言之仍令掌神宝也と有る是より又三十九年十月五

十敷瓊命居於茅渟菟砥川上宮作劍一千口因名其劍  
 謂川上郡亦名曰裸部伴藏干石上神宮也是後命五十  
 瓊敷命<sup>ニムツク</sup>主石上神宮之神室と見えたり<sup>ニムツク</sup>伴主ハ令掌  
 あり事前後引る文子見合せて知べし又八十七年  
 春二月丁亥朔辛卯五十瓊敷命謂妹大中姫曰我老也  
 不能掌神寶自今以後汝主焉大中姫命辭曰略然遂大  
 中姫命授物部十千根大連而令治故物部連等至于今  
 治石上神室是其縁也と有る上は同ト<sup>其主字を天孫</sup>  
 書に又當主汝祭祀者天穗日命是也と有る祭祀の夏  
 を掌れりよて其ハ神室の事ハ非るなり又右は掌  
 字に對へて治字を書れたるハ古事記國作段は是時  
 有光海依來之神其神言能治我前者云々爾大國主神

△私記子麻匡阿良  
 手左有り

曰然者治奉之状奈何答曰言吾者伊都岐奉干倭之青  
 垣東山上此者坐御諸山上神也と有る如く神を齋く  
 事を治と云るなり此治を掌と換て記れり合せ  
 て其神室を主る神主と為て齋奉る事を云事知べき  
 あり○蛇之齋正口訣ハ断蛇以貴而云阿羅正哉也と注  
 一纂疏ハ蛇之麁正者斬蛇十握劍之名言劍氣麁也  
 と説<sup>ヤ</sup>給へり就て今思ふに蛇之ハ第三一書あり  
 蛇之韓鋤之劍ふども同トと此言の上は置るハ其断  
 蛇の事ハ就て後より置る言ハ本より<sup>ハ</sup>の称ハ  
 非ず其十握劍の銳利ハ依て麁正劍と号け其形容ハ  
 就て韓鋤劍と云ふ始よりの称あり可き諸齋正の  
 言義ハ右の口訣の説甚ふ善りけり其ハ阿良ハ

阿耶と同トク歎辞多事傳十九五百四云云  
 心得べし古語拾遺事之甚切皆稱同曰安那と有る此と同  
 言ふり麻佐ハ正哉とて瑞珠盟何神出約章第三一書素彥  
 鳴尊其誓言驗有て男御子を生坐る所則称之曰正  
 哉吾勝と有る御言を揚させ給へる事實此ハ同ト  
 く有けり先子吾當為汝殺蛇と御言奉為させ給へる  
 違ハせ給はず然計り可畏き大蛇を事と無く退治  
 させ御在し坐て其尾中より神より御劔をさへ得  
 させ給へるハ阿良正哉と已尊も揚言給ふ可く又其  
 二神よりも阿良正哉と指歎き感け奉りけむが即其

古語拾遺其其天  
 十握劔其名天羽  
 羽斬今在石上神  
 言古語と有り

功成坐る十握劔の名ハ自然と成て傳はる可き勢  
 ありも亦自然の事あり可し然れハ鹿ハ借字と有  
 也との御説も然ら事ふが其子てハ荒勝の意と成  
 て却りて慷慨の意薄きと似たり斯る古史徴と成  
 蛇之鹿玉と文を成して其徴をえ書ふ正と有る玉  
 作らハ二十社注式に引ら依り云云云云云云云云  
 ども其ハ決めて誤寫なり今諸本共御紀と同一ハ  
 鹿正と有るらに従い難し且其大蛇を斬むと為させ  
 給ふ此方ハ属てころ荒玉と云べかりけれ上子蛇  
 之と有るハ其斬る奉る御劔ハ荒魂の属たりと云  
 事疑ハ返其私記ハ鹿正ハ作れハ然本も有ける者也  
 断蛇之劔今在吉備神部評也と有と全く一事と聞え  
 然らる口訣ハ石上大和國山邊郡石上坐布都御  
 魂神社一説備前國赤坂郡石上布都魂神社と書して

二説を載るゝ必所以有べし此大和國石上の天孫本  
紀子宇麻志麻老命先獻天瑞宝亦猶豎神楯以齋矣謂  
五十櫛亦云今木刺統於布都主劍大神奉齋殿内即藏  
天璽瑞宝以為天皇鎮祭略と見えたり其ハ神武天皇  
御世の事なり其伊香色雄命條ハ磯城瑞籬宮御宇天  
皇御世略遷建布都大神社於大倭國山邊郡石上邑則  
天祖授饒速日命自天受采天璽瑞宝同共藏乎石上大  
神ト有る是其石上神宮ト謂ゆハ詔靈神劍ト十種神  
寶トを祀祭らるゝ始より其後ハ御世トこの天皇等  
天下ト止事無キ神宝トた子云へハ先神宮ト齋し置

セ奉給ニ事世この御史を以て見奉り知る可し斯レ  
ハ此蛇之麓正も其始草薙御劍ト共ト天上ト奉らせ  
給へるを天神御子の御天降の御時ト天璽ト共ト天  
降トせ給へる又ハ饒速日命の十種神寶を將下  
せ給ひけり時ト携へ御在し坐けむを彼天璽の如く  
主トしき神宝ありざりし其二所ト置けり故ト  
自然ト其傳ハ亡ふいたりし石トて往古  
より傳へて祭采れりけり然思合せり事ハ神  
名式ト大和國山邊郡出雲建雄神社ト云有て右の石  
上坐布留御魂神社ト第一攝神あり若て其出雲ハ

ハ又左の細書  
云々如く往古  
出雲傳ハル  
崇神天皇御世  
小宮上りて其  
宮にて祀采れり  
有む

並名神大月次  
相嘗新嘗日



記傳九行小石上一  
書小吉神神部許  
も有る御前國赤  
坂郡石上布都之魂神  
社是より云り實小  
三應い誰も然思ひ  
れど思思へん然非  
す其故い然し名高  
手後らるる實是吉福  
多ると唯石上とし  
云てむ若吉神の  
必吉福石上とし  
はれ然れ猶後石  
上より可一傳書紀上  
崇神天皇十年出  
雲大神宮に藏れ神  
神室と云て見給事  
有り並仁天皇十年  
物部十市根大連小詔  
て出雲の神室と檢  
校し仍て神室と  
言ふらし又八十七年の  
文小同人石上神室を  
當年の事見ゆ然れ  
ハ須佐之男命の御劍  
出雲神宮に藏れり  
一と右の崇神密仁  
天皇御收ふと金の  
神室と共小京小石  
上給ひて其時しや  
石上の納つられし

此大神の御在し坐けり本國の取を取れりて其建  
雄神と申すふじ御名子御在し坐けれバ此劍を納  
祭りれ一以来称奉り來る事と所思たり其傳廿三  
三百三子云る尾張國本國神名帳子知多郡武雄神社  
を此大神と申す説有り又貞觀三年子備後國天照麻  
良建雄神同八年子播磨國速風武雄神と出たふふど  
皆此素戔嗚大神あり可き子思合せて曉る可一又思  
其出雲と冠ふりせたるい崇神天皇六十年御紀子詔  
群臣曰武日照命一云武夷鳥一云天夷鳥從天將末神  
室藏干出雲大神宮是欲見焉則遣天日部遠祖武諸獨  
一名大母偶他而使獻と有れ是時迄出雲國子傳ハ  
世孫物部武諸隅連公と有て右の事を載せ奏復命之

備後小丹以有て備前國へ遷奉りし其時傳の本宮の名を取て彼方より石上布都之魂神社といひし事ハ書紀拾遺卷  
小在石上云り初傳不在り時の傳ハ在吉福と云り此給ひて後の傳より可一辭と有り實小然らざるなり

二つ小事次

時乃為大連奉齋神宮と見えたり此神宮と申すハ即  
石上大神小御在し坐せバ此時子右の蛇之麁正を  
出雲より上せて此神宮然るを第三一書小今在吉備  
小ハ收りれむ日こり大和國石上より後小遷されたる也  
神部許也と有ハ石上見えたるが如く神名式小備  
前國赤坂郡石上布都之魂神社と有る是ふらバ此時  
の斷蛇の劍ハ一も蛇之麁正又ハ蛇之韓鋤劍又ハ天  
之蠅斫之劍と云名こりハ有けれ本より節靈と云称  
の有べくも非りけり後小此御劍を此小移鎮られ  
たれバ(とて其号を用ふ)と云物又ハ素戔嗚大神  
の御名を以て其社小称申さる可き小然らぬハ其大  
和あり本宮の名を其任小移されたり少て此小ても

然るに託傳載りし  
 小神叙言大和の石  
 上遷一奉此社  
 坐す云り有  
 思上真始出  
 雲上京上上  
 御在坐被石上  
 神宮細答へ  
 直後吉備神部  
 の許遷奉れ  
 本宮唯御  
 のを留祭れ  
 又故有て再石上  
 遷奉れを以て  
 今在石上書  
 石語指遺り  
 今在石上神宮  
 傳へり者多可

布都之魂神社と云ふは申せし祭神の稱も又劍号  
 にも非る者あり諸大和の方所にい其劍を故有て其  
 吉備國小ハ移されたり一より唯其御魂のを留の  
 祭られて別小出雲建雄神社ハ祀ハれたり一者とし  
 所思ゆり事ありけし猶奉り事ハ傳廿六十九其  
 所子就て云べし門内子在り然るに世人此宗神天皇  
 六十年御死歌子見えたる伊頭毛多鷄流が事と思ふ  
 甚く誤り彼ハ古事記日代宮段上出雲建と有て  
 建ハ多神流あり此建雄と有  
 コハ言異て別ある者をや  
 モテイナクノミヤメニスサノヤ

是後以稻田宮主篁狹之八

箇耳生兒眞髮觸竒稻田媛  
 遷置於出雲國皷川上而長  
 養焉然後素戔嗚尊以爲妃  
 而所生兒之六世孫是曰大  
 己貴命大己貴此云於褒姒

娜武智

大日貴女

上伴ハ彼大蛇を退治させ御在り坐て草薙劍を得させ給へ事の較略あり此ハ是後と有ハ其事竟て後の御所置を云處あるガ亦意を加へて聞く可事なむ有けり然るハ正書ハ劍を得させ給へる後の所ハ素戔嗚尊曰是神劍也吾何敢私以安平乃上獻也於天神也と見え弟四ノ一書ハ素戔嗚尊曰此不可以吾私用也乃遣五世孫天之音根神上奉於天と有ハ此御政ハ其大蛇を退治させ御在り坐ける即の事ハ其處ハ

於て直子行ハせ給へり由己ノ傳世三十百子註せ

如くふれバ此ハ是後と有るむ其御時の事ハ係たる事ありけり右の天之音根神を五世孫と云ハ誤なり此御事を述ハ後あり如く云ハ若て其奇稲田媛命を遷置於出雲國簸川上而長養焉と有ハ上子下到於安藝國可愛之川上也と有る其鳥髮地子其女神をば生るる其より稲田宮子移せり事と云ハ所見たり正書ハ然後行見將婚之處遂到出雲之清地焉乃言曰吾心清清之於彼處建宮と有る此ハ當り可然るハ右の清地ハ風土記ハ謂ゆる大原郡須我山ハ郡

合て自河上至河上橋  
河上郡五郡言姓便  
河上郡  
白く獨獲の  
と云非され其水  
澤に其地を云  
化し出雲郡より  
上り河上

家東北一十九里一百八十歩と有れども鯨川も當郡  
斐伊郷を經るに就て名る所ふれども唯大凡と云時ハ  
川上と云て違へる地理に非れども  
同記に斐伊川  
郡家正西五十  
七歩西流入出雲郡多義村と見え又出雲郡出雲大川  
源自伯耆典出雲二國郡島上山流出仁多郡横田村即  
經横田三度三澤布勢寺四郷出大原郡引沼村即  
兼次斐伊屋代神原寺四郷出出雲郡多義村經河内  
出雲二郷北流更折西流即經伊勢并築二郷入神門水  
海此則所謂斐伊河下也と有る此を以て見ると其  
出雲郡に至りて斐伊河下ふれども其對へて○直髮  
大原郡以上ハ河上と云事云も更ふりたり  
觸奇箱田媛の冠辞考も真ハ此ハ髮を美稱たり言奇  
ハ高日伴都久志米具志ふと云も同トく愛憐くしむ  
語ふるを觸の方と云轉したるなり此ハ觸ハ髮と觸

物ふれども然冠りしむるあり取と有り万葉十一  
朝宿髮吾者不梳愛君之手枕觸義之鬼尾と有ハ  
手枕の髮と當れる事を云ふれども其梳る事を觸と  
云けむ故に其事を係て觸といふ云るなり又空穗物語  
に其昔に舊に物を改め是こり黄楊の小櫛いかり  
知ると有る觸を舊と云係たり者なり傳廿三  
小己小云々如く正書に故素戔鳴尊立化奇稲田姫為  
湯津凡櫛而挿於御髻と書され古事記にも不速須佐  
之男命乃於湯津凡櫛取成其童女而刺御美豆良と有  
る此等の御事小就て負坐る御名小て奇稲田媛命と

申すも神名式子能登國能登郡久志伊奈太伎比賣神  
 社と有る其即御本名子てクニイナケヒメ櫛髻姬命と申す義ふるが  
 故子自然子真髮髻の發語を冠て稱奉り来り事子こ  
 子ハ有べりりけれ冠辭考子彼薦批高御産栖日神天  
 冠辭を置ハ上代の文の状あり古事記日本紀ハ斯る  
 類の語共多きハ甚古(代)の文の有つるを取て書し  
 故と所見たり此子依ても甚上代の語の雅びあり  
 一を知べしと云れたるハ實子然る言子ふし有けり  
 ○遷置於出雲國敷川上而ハ上子云るが如く安藝國  
 可愛之川上あり鳥髮地より稻田宮子遷置るを云ふ  
 其稻田宮と云ハ古事記子謂ゆる須賀宮子大原  
 郡須我山御室門山の間子在つる事傳廿四十四小

但此是也山陽道の  
 安藝國より出雲  
 國の敷川上子遷置  
 る事ハ甚古(代)の  
 事ハ本紀ハ取て書し  
 へる條子以て明  
 記ハ  
 公記子止之且  
 子訓り為事の  
 意を理ハ然ら  
 事ふる外の例子  
 達り備此

註子如し遷置ハ字都志須惠氏と訓て移居の字の  
 義あり須字とハ人をして其處小令在るを云ふり万  
 葉六十四子野上者跡見居置而御山者射日立度と有  
 る是あり。○長養ハ日足す謂ふ事傳十五二百小注  
 ろが如し○為妃ハ妃字を美賣と訓り御女妻の義小  
 て正妃を牟加比賣と訓り對あり(與)妃の例ハ天孫降  
 臨章第二一書小以思兼神妹萬幡豊秋津姬命配正哉  
 吾勝ニ速日天忍穗耳尊為妃ミナト略第二一書子以高皇産  
 靈尊之女號萬幡姬配天忍穗耳尊為妃下略第七一書子  
 高皇産靈尊兒萬幡姬兒玉依姬命此神為天忍骨命妃ミ

タリ。古事記と異  
コ御高木神之カ  
萬曆堂秋津師比  
高皇命と有ルハ正  
妃の例あり

と有る此二ハ同ト事トシテ書サレ状の少ク異なり  
のミ神皇承運章子彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊以其姨  
玉依姫為妃と有る此ハ海神の御女子渡らせ給へ  
ハ正妃と渡らせ給ふ可く不む有けれハ神代の御事  
ハ後の例とも全クハ合セ難キ故キ其より以來を推  
す子神武天皇前紀ト娶日向國吾田色吾平津媛為妃  
と有る己未年九月壬午朔己巳納媛踏鞢五十鈴媛命  
以為正妃辛酉年春正月庚辰朔略尊正妃為皇后と有  
て正妃と妃とを別たれたり孝靈天皇二年御紀ト五  
細媛命為皇后略妃倭國香媛略孝元天皇七年御紀ト

立齋色謹命為皇后略妃伊香色謹命略次妃河内青玉  
繫女埴安媛略開化天皇御紀ト立伊香色謹命為皇后  
先是天皇納丹波竹野媛為妃略次妃和珥臣遠祖姥津  
命之妹姥津媛崇神天皇元年御紀ト立御間城姫為皇  
后略又妃紀伊國荒河戸群女遠津年魚眼眼妙媛略次  
妃尾張大海媛略と有て何れも如此く不ハ悉舉  
ト違立宣化天皇元年御紀ト立前正妃億計天皇女橘  
仲皇女為皇后略前庶妃大河内稚子媛略天武天皇元  
年御紀ト納天命別天皇女菟野皇女為正妃と有て  
同二年ト立正妃為皇后略先納皇后姊大田皇女為妃

と有る正妃と妃を對へたるは殊小庶妃とさへ書几  
たり履仲天皇<sup>元年</sup>御紀に立葦田宿禰之女黑媛為皇妃と  
有る美賣と訓たれば正妃の例は非ると見ゆ然れ  
ハ右の皇字ハ天皇に係れるまで其は唯の妃あるか  
つけし雄略天皇七年御紀に便欲自求稚媛為女御  
と見え又履仲天皇六年御紀に喚鮎魚磯別王之女太  
姫郎姫高鷲郎姫納於后宮並為嬪用明天皇元年御紀  
に立蘇我大臣稻目宿禰女石寸名為嬪ふと有る妃を  
小庶妃をも女御をも嬪をも皆美賣を用ひて正妃又  
ハ皇后は別たれたる御紀の文法ふり後宮職員令を  
見ると妃二員

右四品以上夫人三員右三位以上嬪四員右五位以上  
者有る古の唱ハ皆美賣ふれと字を以て書別たる  
者然れども此は奇稻田媛命の御事と素戔嗚尊以  
為妃と有るればとて後の妃夫人の倫として如何ハ  
御在り坐じ己に正書は乃相與適合而生兒大己貴神  
因勅之曰吾兒宮首者其脚摩乳手摩乳也故賜号於二  
神曰稻田宮主神と有る此女神の御父母二神を以て  
其御兒大己貴神の傳に参らせられたる事ハ申すも  
更なるが其負せ給へるは稻田宮の名を以寄給へる  
ハ其奇稻田媛命に起れる宮号あるが上は第一一書  
は乃於奇御戸起而と有る奇御戸ハ隱處の義として

古小夫婦相隠りて妹妹の語りひを為す身屋の終り  
 て並ての事ハ有けりども此ハ二柱御祖神ハ始り  
 て此大神ハ起れり御事ハ御在ハ坐ハけりハ殊ハ止  
 事無キ御契ハ御在ハ坐ハけりハ此清地ハ到ラせ御  
 在ハ坐ハて吾心清清之の御言を攀サせ御在ハ坐ハて御  
 子ハ天下を所造給フ大國主神を生奉ラせ給ヘる  
 程の御事ハ御在ハ坐ハせハ此大神ハ幸レ奉ル女  
 神ハ猶ハ此餘ハ御在ハ坐ハれハ實ハの嫡ハ后ハ申奉れ  
 るハ此奇稲田媛命ハ渡ラせ給フ御事申スも更テる  
 若テ傳ニ二十三三百二ふも云フが如ク神名式ハ

出雲國意宇郡熊野坐神社名神と有ハ此大神ハ御  
 在ハ坐ハすを其並ハ前ナ神社ト御在ハ坐ハすハ此女  
 神ハ渡ラせ給フ可クふハ有ハけりハ後の事を以テ申  
 さハむハ謂ユ正妃ハ坐ハ又皇后ハて渡ラせ給フ  
 御事今更テ申スむも事舊ナ心ハ不レ為ル御ハ大  
 己ハ天上ハより伴ヒ給ヘるハ后神坐テ其ハ五十ハ猛命  
 社の御母ハ渡ラせ給フ大夜女命ハ同郡山狭  
 神ハ同社坐テ美氣濃神社ハ坐テ是ハ又古事記  
 見ル見ル大津見神ハ御女ハ神ハ大市比賣命ハ御合  
 坐テ時ハ稻荷神社ハ坐テ右ハ奇稲田媛命ハ正妃ハと  
 定ムを以テ強ベきハ所生兒ハ第一ハ書ニ乃チ於テ奇御  
 戸為起而生兒号清山湯山主三名狭漏彦八島篠略ト



と有る是ふり古事記ハ故其擲名曰比賣以久美度  
迹起而所生神名謂八島士奴美神と有て其より六世  
孫の名を署せり其事委しくハ傳廿四卷ニ注せきハ  
今云ふ限ハ非ず○兒之六世孫ハ其八島篠神より數  
ふり少て第一一書曰五世孫と有ハ其を除きて數ふ  
るふれハ共ニ同ト事あり申旦右の五世也此六世也  
共ニ傳の誤ありよて實ハ大已貴命ハ素戔嗚大神  
奇稻田媛命ニ柱の奇御戸ト起ニ令生給へる所ナリ  
て其八島篠神ト申すハ此亦名ニ御在ニ坐す由共ニ  
傳廿四三十一トハ已ニ論りハ注せるを見て曉る可き者

あり○大已貴此云於褒姒娜武智ハ傳廿三百  
已ハ注せり已字ハ音志ナリ已説文已也四月陽氣已  
出陰氣已藏万物皆成文章故已為蛇象形と有る是ハ  
リ已ハ非ず又已ハ非ず書僻むる事勿ル



